

坂の上通信

令和元年十一月一日
広島市立美鈴が丘高等学校
新聞文化部(四〇三演習室)

体験記 今年も美高から県代表

国語科の夏休み課題の定番「読書体験記」だが、校内選考を経て「全国高校生読書体験記コンクール」に応募したところ、2年6組の荒井優さんの作品が広島県代表(五編)の一つに選ばれた。荒井さんは昨年度も今西乃子作『犬たちをおくる日』を読んで書いた作品で、県代表に選ばれている。本人の許諾を得て全文を掲載する。

私の箱根駅伝
2年6組 荒井 優

この本を読み終わった時、私は汗をびっしょりとかいていた。それは決してコタツに潜っていたせいだけではなかったと思う。

私は中学校、高校と剣道部に所属している。「武士道シンクステーション」という本の主人公に憧れて中学校から剣道を始めた。始めたばかりの頃は勝敗よりも、尊敬する先輩、共に切磋琢磨できる同級生との稽古で自分がメキメキ上達していくのが嬉しくて楽しかった。しかし学年が上がり、試合に出場する回数が増えるにつれて、「勝ちたい」「もっと大きな大会に出たい」と思

うようになった。しかしほとんどが初心者というチームで、地区大会で優勝もしたことのない状況だった。そんなチームが勝てる訳がない、私はそう思った。そしてそう思うと同時に、剣道に対するワクワクや、剣道が好きだという気持ちは薄れていき部活動に行くのも憂鬱になっていた。

そんな時に出会ったのがこの本だった。大好きな三浦しんさんの作品。今度はどうな話なんだろう、と楽しみにページをめくった。圧倒的な才能に恵まれるが、それにより孤独になってしまった長距離選手の走りが、自分の好きな走りをする夢を見る清瀬に誘われ、初心者だらけのチームで箱根駅伝を目指すという物語だった。個性豊かな登場人物達がおもしろく、私はどんどん読み進めていくかのように思えてきた。経験もなく自信も

ない。だから自分にはできる訳ないと思っただけで、周りからも期待されなくて、だんだんと読むのが苦しくなってきた。しかし、もう一ページ、もう一ページと読んでいくと登場人物たちの様子が変わってきた。色々な出来事や、清瀬の言葉によつて自分に自信を持ち始めたのだ。そしてついには彼らは目標としていた箱根駅伝への出場を決めた。本を開いて、びしょりとかいた汗を拭いながら、胸のドキドキを抑えながら

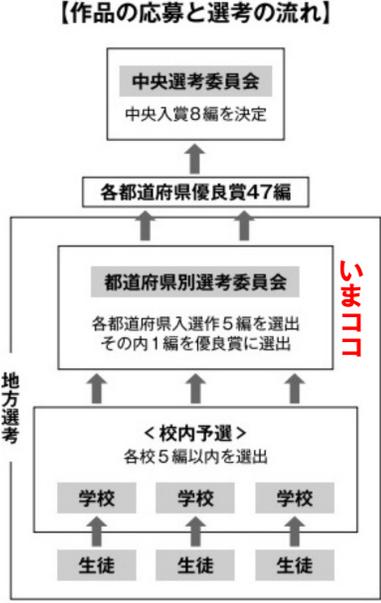
私はその日までの自分を恥じた。やる前から、ななつつまらないことを考えていたのだから、そう思った。二か月後の部活動集会、中学校生活最後の年の始めに私は全部員の前に「県大会出場」を目標として掲げた。笑われるかもしれないと思った。馬鹿にされたらどうしようと思っただけで、誰とも笑わなかった。そして黙って「部活動年間目標」の欄に「県大会出場」と書いてくれた。その日から道のりは決して楽な道のりではなかった。身の回りの整理整頓から始まり、技の出し方まで、様々な場面で話し合いをして問題を解決していった。

話し合いの中で喧嘩もたくさんしたし、毎日の稽古はハードで大変だった。古はハードで大変だった。何より大好きな仲間と全力で取り組む剣道が大好きになった。そして自分に自信が持てた。その年の夏、私たちは最後の大会で県大会への出場権を勝ち取った。剣道部創立以来、初めてのことであった。それは周りに、「そして「できる訳ない」と思っていたあの頃の自分たちに「できる」ということを証明した瞬間だった。高校でも、私は剣道部に入部した。残念ながら同級生はいなかったが、素晴らしい先輩、後輩と共に毎日楽しく剣道

道をするのができていく。「諦めない」、「自分に自信を持つ」。よく聞く言葉だが、私はこれが一番大切で一番難しいことなのではないかと思っただけで、これらが出来なければ目標は達成できない。しかしこれらは決して決して一人ではできないことではない。だからこそ、私は一緒に戦ってくれた仲間にとっても感謝している。そしてそのきつかけをくれた、走を始めたとする十人の竹青荘の住人達へも感謝の気持ちでいっぱいだった。彼らは私に「剣道が好きだ」という気持ちも再確認させてくれた。物語のクライマックスで、走に走る意味を教えてくださいました。清瀬が競技中に怪我をしてしまう。その時彼を突き動かしたのはきつと仲間との存在と走ることが大好きだといった気持ちだと思っただけで、また、孤独だった走の心が開いたのもやはり走自身が走りたの好きだったからではないかとも思う。私は剣道が大

好きだ。礼儀を重んじ、相手への感謝を忘れない、心身が鍛えられ自分自身を見つめることができる。そんな剣道への愛をこの本を読むことで改めて感じられた。今でも時々、頑張ることが嫌になる瞬間がある。何度やっても上手くいかず投げ出したくなることもある。そんな時はきつかけでこの本を読み返す。私に勇気と自信、そして競技することの楽しさを教えてくれるこの本を。そしてまた一歩踏み出す。私にはいつも支えてくれる仲間がいると信じているからだ。そしてその仲間たちがいれば何だってできると思う。だから私はこれからも、また一歩、また一歩、また一歩、と歩き続けられると思っただけで、

読書体験記コンクールとは
公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、毎年実施しているコンクール。高校生ができるだけたくさん本と出会うきっかけをつくることを目的としている。今年で第39回目となるが、昨年度は全国から438校の参加と、96805編の応募があった。



【作品の応募と選考の流れ】

「風が強く吹いている」三浦しん(新潮社)

「風が強く吹いている」三浦しん(新潮社)

「風が強く吹いている」三浦しん(新潮社)

「風が強く吹いている」三浦しん(新潮社)

形容詞なまるまる

進路指導の首藤先生にとつての「形容詞なまるまる」は「みやすい漫画」。作品は「はたらく細胞」である。

紹介者	理科・首藤先生
形容詞	みやすい
対象	マンガ

「どんなところに「みやすい」を感じますか?」この漫画は、赤血球や白血球、キラーT細胞などの細胞たちが擬人化し、体内の様子を描いている作品なのですが、生物の勉強にもなるそうです。前に生物の授業でやったなとしみじみ思うことでもあります。

「作品の見どころは?」

漫画の中に「すり傷ができてしまつて色々な細胞たちが協力して体内に入ってくる害から体を守る」という話があります。気にならないうような小さなすり傷でも、多くの細胞たちが頑張ってくれているところがすごいなと感じました。

荒井さんの話

今回県代表に選考された2年6組の荒井優さんにインタビューを行った。本が好きで、同じく読書家の父から薦められる本を中心に年間15冊以上は読むそうです。

「この本を手にとったきっかけは?」
父がすすめてくれたことです。作者の三浦さんが、自分の好きな作家だったことも理由です。

「この本の魅力と面白さは?」
箱根駅伝のお話ですが、クライマックスで手に汗握る接戦に夢中になりました。昨年が続いての県代表ですが、感想は? 嬉しかったです。家族からもすごいねとたくさん誉められました。ちなみに、今朝読んでいる本は? 同じ作者ですが、三浦しんさんの「愛なき世界」です。

美・鈴・鈴・鈴

朝読書は、70年代から各小・中・高等学校で行われてきた。01年に文部科学省が「あいさつ」「正しい姿勢」「朝の読書運動」を3つの柱として「21世紀教育新生プラン」を提唱したことで、一気にさかんになったと言われている。▼朝の読書には四つの原則がある。①みんなで行う、②毎日やる、③好きな本で良い、④ただ読むだけ、がそれにあたる。感想文などは求めず、毎日継続的に読書の時間をとることを目的に作られた原則である。▼朝読書は読書の時間を確保するだけでなく、ストレス解消や、朝に読むことによって脳が活動しやすくなり集中力をアップさせるという効果もある。そのため、大人になつても続ける人がいるようだ。▼「継続は力なり」というように、高校生のうちから朝読書を継続させることで、生涯を通じて本に親しむ人に近づけるだろう。朝読書というせひいたく時間を使ひ充実したものにしたい。

(福田紫乃)

編集後記

本をたくさん読むことで今回掲載しようとした「感想を言葉にする力」が身につくはずだ。